

怨讐の旋律

—グリム童話「唄う骨」(KHM28)をめぐって—

● 金 成 陽 一

この物語を幼い子供に聞かせるのに少なからぬ抵抗を覚えるのは、きっと私だけではないだろう。純真で馬鹿 (unschuldig und dumm) な主人公が金持ちになってめでたく結婚する訳ではなく、それどころか、抜け目なく賢い (listig und klug) 兄に、いともあっけなく殺されてしまうのだから。悪事を働いた兄が最後に罰を受けてはいるけれど、この作品は幸せな結末を鉄則とする収集童話 (Volksmärchen) から見るなら、死んだ弟は生き返らず、一種のアンチ・メルヘン (Antimärchen) となっている。

ごく簡単にあらすじをご紹介します。

昔、ある国で、大きくて獐猛な猪が暴れまわり、困り果てた王様は「この猪を退治した者には、一人娘を妻としてつかわす」と御布令を出す。そこに狡賢い兄と純情で馬鹿な弟の二人兄弟が名乗り出て来たのだ。弟は小人に貰った槍でいとも簡単に猪を殺し、家に帰る途中、酒場で陽気に騒いでいた兄と出会う。弟に激しく嫉妬した兄は暗闇で後ろから弟を殴り殺し、死体を橋の下に埋めてしまった。そして猪を王様のところへ持って行って、お姫様と結婚したのである。

それから長い年月がたったある時、一人の羊飼いがこの橋の下の砂から白い小さな骨を見つけ、それで角笛を作った。それを吹いてみると、骨がひとりで唄をうたい出したので、彼はびっくりしてすぐに王様のところへ持っていったのである。角笛は王様の前でも同じ唄をうたったのだ。

おいらを殴って 橋の下に埋めたのは おいらの兄貴

おいらが殺した巨大な猪と引き換えに

お姫様と一緒にするためさ

(王さまには、うたのところがちゃんとおわかりになりましたので、橋の下の地めんを掘りかえさせましたら、殺された男の骸骨が、まるごと出てきました。わるものの兄さんは、じぶんのやったことをそうでないとは言えず、袋のなかへ縫いこまれて、生きながら川へ沈められました。それから、殺された男の遺骨は墓地へうつされて、りっぱなお墓のなかに安置されました⁽¹⁾。)

弟殺しの物語で真っ先に思い浮かぶのは、旧約聖書「創世記」のカインとアベルだろう。カインはアダムとイブの長男であり、アベルは二男である。カインは土を耕す者 (農民)、アベルは羊を飼う者 (牧人) であったが、神は何故かアベルの供え物だけが気に入って、カインと彼の供え物には見向きもしなかったのである。大いに憤ったカインはアベルを野原に連れ出して殺し、神に弟の居場所を聞かれても、「知りません。私が弟の番人でしょうか」(第4章9節)と平然と答えていたのだが、彼は神に、エデンの東ノドの地に追放されたのである。

ここで奇妙に思われるのは、「私の罰は重くて負いきれません。放浪者となった私は、誰かに殺されるでしょう」と、やや反省の弁を述べたカインに神が、「誰でもカインを殺す者は七倍の復讐を受けるでしょう」と言って、彼を罰するでもなく、更に打ち殺されることのないように一

つのしるしをつけて解放している点である。「出エジプト記」でモーセの前に現れた神は、「あなたの神、主であるわたしはねたむ神である。わたし以外なものも神としてはならない」と、唯一神への信仰を求める十戒を与えている。「あなたは殺してはならない」（第20章13節）は、よく知られた十戒の戒めであり、その後には「人を撃って死なせた者は、必ず殺されなければならない」（12節）という言葉も出ているというのに、このような神が嫉妬から実弟を殺したカインを何故死なせなかったのかは大きな謎といえる。アベルが殺された世界でカイン以外の人間は両親であるアダムとイブしかおらず、カインを殺す誰かとは両親なのかという疑問も湧く。S.H.フックは豊穡の供犠について次のように説明している。

「生贄を殺した人はそのために身が汚れる。儀式によって身を守ってもらう理由はそのためなのである。しるしをつけるのは、おそらく、入れ墨か何かして、逃亡する人が実は聖なる階級の人であるということを示すためであろう。予言者たちがそうしたしるしをつけていたという証は、その起源をたどると、ヘブライ人の中に見つかる……『羊飼い』という添え名を持つタンムーズは、夏の乾期に、死ぬか、あるいは生贄として殺される……タンムーズを役目上殺した人は、儀式とは言え、殺した罪をその社会から拭い去るために、逃亡しなければならなかった」⁽²⁾

肉食を主とする民族の神が草食系の供物よりも、アベルが供えた羊（血の生贄）の方をはるかに好んだとは考えられることだ。羊を屠って神に捧げる場面は旧約聖書に数多く出ており、「創世紀」でも神の信を得たアブラハムが、息子イサクの代わりに一頭の雄羊を燔祭として捧げている（第22章13節）。

「カインとアベル」の話は元を辿ると、ペルシャの暗闇の神アーリマンと太陽神アフラマズダという双子の兄弟の神話からきている。「アフラマズダは神ヴェーユに生贄を捧げ、それを受け取ってもらった。しかしアーリマンは供物を受け取ってもらえず、裏切り者、悪魔と宣告された⁽³⁾」。結局、二人の戦いは、アーリマンが天界から落ちて終わりを告げたのである。

グリム童話「歌う骨」の兄が弟を殺したのも嫉妬からであった。狡猾で利口な兄の姿は、考えながら畑を耕すカインに、そして無邪気で馬鹿な弟は無知な遊牧の羊飼いアベルに重なって来る。お天気によって種蒔きや収穫の時期を見定めたり肥料の量を調節したりと、農耕は馬鹿には難しいのである。弟のあまりにも無邪気な態度が、狡猾い兄の凶暴さを誘発したとは十分に考えられることではないだろうか。

しかし、たとえどのようなことがあっても「人間は純真であるべきだ」というのがこの物語のメッセージなのだろう。

〈猪あれこれ —ギリシャ神話より— 〉

猪突猛進と言われる如く、猪は原始的な力で突進し大地を掘り返す。何ものにも我武者羅に攻撃していくこの動物の獐猛さには、昔の人々も大いに手を焼いたに違いない。猪は猟犬の群れに囲まれるまでじっと待ち、それから攻撃に転じ、犬をずたずたに引き裂くのだという⁽⁴⁾。物語の中でも猪は畑を荒らし、家畜を殺し、人間をも牙で引き裂いていた。今日でも野生猪のその性格はちっとも変わらず、時々山から町に姿を現しては大暴れして人間を困らせる。大体中型犬と同じぐらいの大きさの日本猪に較べて、絵画に描かれたヨーロッパの猪を見ると、熊ほどの巨大なものもいるようだ。しかも鋭い牙をもっているのだから、普通の人がかんな動物に襲われたならひとたまりもないだろう。

ギリシャ神話の中の猪に関する話をいくつか見てみよう。この神話からだけでも昔から猪がいかに人間に身近な存在で、しかも手に負えぬ厄介な動物であったかが伝わって来るだろう。

まず始めは、ヘラクレスの良く知られた「十二の難業」。ゼウスの妻ヘラから狂気の発作を送りこまれたヘラクレスは、自分の妻子を宿敵と思い込んで殺してしまう。一説によると、ヘラが執拗にヘラクレスを迫害したのは、彼を産んだ母親に対する焼き餅からだったという。しかし、ヘラクレスとは「ヘラの栄光」の意なのだから、この説だと少々名前にそぐわない気もする。「ヘラの嫉妬」とでもするならよくわかるのだけど。いずれにしてもヘラクレスの「十二の難業」は、彼が妻子を殺したことに起因している。救いを求めた彼がデルポイの神託を仰ぐと、「領主エウリュステクスの命ずるいくつかの仕事をせよ」との託宣が下り、その結果命じられた「十二の難業」の中の四番目が「エリュマントス (Erymanthos) の猪の生け捕り」であった。ヘラクレスは「繁みから大声で呼びつつ猪を追い出し、深い雪の中に疲れ果てたところを追い込み、罠で捕えミュケーナイに持っていった⁽⁵⁾」のである。

次に、メレアグロスとアタランテの話。ある年、たまたまアルテミス女神にだけ収穫の捧げ物を忘れてしまったカリュドンの王に怒った女神は、その地に怪物の様な猪を遣わしたのだ。ゼウスとレトの娘であるアルテミスはアポロンと双子の兄妹で、野生動物や子供や弱者の守護神である。彼女は狩猟と山野の散策を楽しみ、その楽しみを邪魔する者には容赦なかった。カリュドンの王子メレアグロスはギリシャ中の勇者たちに、この大きな猪の狩りに来るよう呼びかけ、集まった彼らを大いに歓待したのである。そのため彼らは、彼と共に猪狩りをせざるを得なくなってしまった。更に王は「猪を殺した者にはその皮を与える」と言っていたのである。この大猪狩りにはアルテミスと同じく有名な狩人で、やはり同じように頑なに処女を守っていたアタランテも加わっていた。

「叔父のアンカイオス、ケペウスらは女性が入ることに反対したが、アタランテを愛するメレアグロスが彼ら反対者たちの参加を許さなかった。追いつめた猪にアタランテが真っ先に矢を放ち、メレアグロスがとどめを刺した。剥がされた猪の皮は、メレアグロスからアタランテに与えられた。しかしメレアグロスの母の兄弟がそれに反対し、皮を横取りしたため、メレアグロスは彼らを殺し、メレアグロスは母親のアルタイアに殺され、結局愛するアタランテとの結婚は実現できなかった⁽⁶⁾。」

やはり狩の最中に猪に襲われ、鋭い牙で突き殺されてしまったのは美少年アドニスである。キプロス王と娘との近親相姦から生まれたこの美少年に惚れてしまったのが、美の女神アプロディテと死者の国の女王ペルセポネであった。彼女たちはアドニスのあまりの美しさに何の抵抗もできぬほど魅了されてしまったのである。「恋の鞆当て」とは元々一人の女を巡って二人の男が争うことだけれど、この場合は逆の形でしかも争っているのは二人の女神なのだ。結局、神々の中の神ゼウスによってつけられた決着とは、「アドニスは一年のうち三分の一は地下でペルセポネと、三分の一は地上でアプロディテと暮さねばならぬ。残りは好きなようにして良い」というものであったが、アドニスは残った三分の一もアプロディテと一緒にいるのを選んだのだった。

「アプロディテの喜びようといったらなく、いつも少年をそばからはなさなかった。アドニスは狩りが何よりも好きだったから、よく野山や森を、獲物をさがして歩いた。すると愛と美の女神も、白鳥のひく馬車からおりては、アドニスのあとについて森や茂みをぬけていくのだった。

ところがある日、女神がちょっと目をはなしているすきに、アドニスは一とうの大きないのししを追いだして、猟犬といっしょに、どんどんその後を追いかけていった。そして、追いつめたところで、さっと投槍をなげつけた。

しかし、槍はいのししを傷つけただけで、仆すことはできなかった。手きずをおったいのししは、彼をめがけて突進してきた。アドニスはいそいで身かわそうとしたが、まにあわない。あ

っと思うまもなく、怒りくるう猛獣のすどい牙にかけられてしまった。

『ぎゃっ!』と叫んだまま、アドニスはそのに仆れた。(中略)

アドニスの血がこぼれた土の上には、やがて春になると、血のように真赤な花が咲きだした。それがアネモネ（ギリシャ語でアドニス）だったという⁽⁷⁾。」

〈小人〉

姉妹間の陰湿ないじめに較べると、男同士はまさに骨肉の争いとなって兄弟を殺してしまうことも多いようだ。グリム童話「黄金の鳥」(Der goldene Vogel: KHM57)も「歌う骨」同様、兄弟の確執を取り上げた物語である。ここでも、ありとあらゆる悪事をし尽くして処刑されることを末の弟に救われた二人の兄たちは、いとも簡単に弟を井戸に突き落として殺そうとした。昔話の中で末の弟や妹がことさら注目されてきた理由は、恐らく現実世界においてはそうしたことが極めて少なかったからではないだろうか。つまり、人間の長い歴史の中で一番可愛がられ大切にされてきたのは大体が長男、長女だったということだ。当然ながら、末っ子は人生で親と触れ合う時間も一番短く、その恩恵も少ない。しかも現代と違って人の寿命は短く、時代によっては三十代、四十代で死んでしまったのだから、尚更だろう。あまり脚光を浴びてこなかったこうした人たちに、昔話は優しく接しているのである。

二つの作品は、一人の女を巡って兄弟が争うというより、どちらも兄が弟の隙を狙って殺している(あるいは殺そうとした)。美しいお姫様と結婚すべく男たちは冒険に出るというのに、我々には彼らが目指す女性の情報は一切知らされないということは、要するに、彼女たちが若い男たちの運命を決定的に左右する存在となっているだけで十分その役割を果たしているということなのだろう。二人の兄弟は、王のアドヴァイスに従って森の中で猪を挟み撃ちにすべく、兄は西側から弟は東側から森へと入って行く(Da ging der älteste von Abend und der jüngste von Morgen hinein.)。東は昇る太陽(つまり夜明けの生命)を表し、西は日没と死を表すから、テキストは既に賢い兄の没落を暗示している一方で、多くの宗教の来世がある西方もやはり世界中どこでも死に結び付けられ、「西に行く」とは死を意味するのだから、東を背にして歩く弟の死も予告されている。

森に入った弟はすぐに一人の小人に出会う。昔話によく登場してくる小人には実は二通りのタイプがあって、一つは文字通り背丈の低い(小さな)人、そしてもう一つは「親指小僧」(Daumesdick: KHM37)などに見られるような人間の親指ほどの大きさ(nur daumensgroß)しかない小人国の住人である。グリム童話には他に、やはり親指ぐらいの大きさしかない(nicht größer als ein Daumen)息子が活躍する「親指太郎修業の旅歩き」(Daumerlings Wanderschaft: KHM 45)がある。日本の「一寸法師」もこのタイプである。

前者の背の低い(小さな)人は、例えば「白雪姫」の七人の小人たちに代表されるだろう。小人たちのベッドの一つが七歳の女の子の身体にぴったり合ったというのだから、彼らは少なくとも一メートル以上はあるはずで、決して数センチほどの大きさではない。また、「地もぐり一寸ぼうし」(Dat Erdmännken: KHM91)の小人たち(en klein klein Männken: パーデルボルン地方の方言で書かれている)も大人の男と喧嘩をするぐらいなのだから、同様の大きさといえる。

弟の前に突然現れた小人を、テキストはドイツ語で普通に用いられるZwerg(小人・極端に小さい人)という単語ではなく、わざわざein kleines Männlein(一人の小さな体格の男・小柄な男)と表現している。彼の体格はゲルマン神話によく登場してくる小人たちと同じぐらいで、弟

が善人だからと槍を与える場面など、ドヴァリンという黒小人がオーディンに投槍をプレゼントしたのに良く似ている。元々彼らは巨人イミルの腐敗した身体から生まれた黒い皮膚の小人で、抜群の工匠たちなのだ。

ある時、いたずら者のロキがトールの妻のために「黄金のかつら」を作ってもらおうとドヴァリンを訪ねると、小人はそれだけでなく尚も素晴らしいプレゼントをしてくれた。一つはキッドブラドニールという海も空も走れる魔法の舟、そしてもう一つが「投げれば必ず相手を倒す」グングニールという投槍であった。この槍がオーディンに贈られ、後に彼はこれを使って英雄ジークムントの剣を二つに折り、死に至らしめたのである。

「ある日、年老いたジークムントが一人の敵対者と戦っていると、彼はふいに一人の片目の男が彼の前にたち現れるのを見た。その男は大きな帽子を被り、ひろいマントにつつまれていた。この未知の男はものも言わずに、ジークムントの方向へ槍をつき出した。ジークムントの剣は槍の木の柄の上で二つに折れてしまった。この未知の男こそはオーディンその神自身であって、その気に入りの戦士の死を決めたので、かつて数多くの勝利を得る武器を与えておいて、その後で彼の剣をうち落してしまっただけなのである。ジークムントは相手に撃たれて斃れ落ちた⁽⁸⁾。」

ジークムントは、主神オーディンが彼の死を望んだのを知って、その意志に従おうとした。そして妻に、折れた剣の断片を大切に保管しておくことだけを命じたのである。この後、彼の息子ジークフリートは別の小人とこの剣を鍛え直して龍を退治し不死身となるのだが、これはまた別の物語だ。

〈昔話の魅力〉

さて、すぐに猪を見つけた弟は、貰った槍をオーディンのグングニールの如くに使って、その怪物 (das Ungetüm) の心臓を真っ二つに断ち切ってしまった (ihm das Herz entzweigeschnitten ward)。そして、猪を担いで家に戻る途中彼は偶然にも、森の入口の酒場で飲んでいて兄に出会い、どのように自分が猪退治をしたのか、その経緯を全て話したのだ。しかし弟に激しい嫉妬心を起こした兄は外に出ると、小川の橋のところでいきなり後ろから弟を殴り殺して橋の下に埋めてしまった。猪に立ち向かい見事これを仕留めた勇敢な弟は、本来王の一人娘と一緒に幸せな人生を送るはずだったのに、こんなにもあっさりと殺されてしまったことに読む者は戸惑うばかりである。

信賴していた人に裏切られ騙し打ちにあっては、誰であれ如何ともしがたいだろう。前述した龍退治の英雄ジークフリートも、義兄である国王グンテルとその忠臣ハゲネの巧妙な罠によって殺されている。二人はジークフリートを狩りに誘って散々に疲れさせ、喉の渇いた彼が泉の上に身をかがめて水を飲んでいて、背後から槍で突き刺したのだ。「傷口からほとぼしる心臓の血はしとどにハゲネの衣服をぬらした」と叙事詩「ニーベルンゲンの歌」は述べる。

「ハゲネは、背部から心臓へつらぬいた槍をそのままにし、

この世の誰からもあんな逃げざまをしたことのないほど、

恐ろしい勢いで逃げだした。

騎士ジークフリート (ジークフリート) は、深傷を負ったのを感じたとき、

狂気のごとくいずみから飛び立った。

両方の肩胛骨のあいだから長い槍の柄が突立っていた。

勇士は弓か、または剣を見つけようと思った。もし見つかったら、

ハゲネはその所業にふさわしい報いをうけたであろう。

(中略)

彼の顔いろは蒼ざめ、もはや立っていることもできなくなった。

その蒼白な顔いろにはすでに死相があらわれて、

生きる力も今や消え失せんとしていた。

のちに彼は美しい婦人たちによって、いたく歎かれるのである⁽⁹⁾。」

「語るように謡い、謡うように語る」のが魅力である叙事詩に較べると、昔話は実に素っ気なく、殺人現場の生々しい描写などには一切関心を示さない。「歌う骨」でも弟が兄によって殺されたことだけを問題として、それ以外の残酷シーンは全て無視し、ただ兄が「うしろからなぐりつけたので、弟は川へおっこちて死んでしまいました」と書かれているだけなのである。弟がどんなにもがき苦しんで死んでいったかとか、あるいは即死状態であったかなど、重要でない部分は全てとばして淡々と話を前へ進めていく。この点こそが昔話の魅力の一つといえる。

〈橋〉

橋の役割とは一方の岸から他方の岸へと渡らせるものであることから、多くのシンボリズムが生まれた。それは地（此岸）と天（彼岸）とを結びつけるものであるとか、感覚世界から超感覚世界への移行、あるいは仲介者（としての人間）等様々である。橋のない時代、こちら側と川向こうとでは自由な交流など出来ず、互いがまるで異なる文化圏となるのは当然であったろう。また、ヨーロッパに数多く残る「悪魔の橋」についての伝説は、芸術作品であるこれらの橋の美しさと堅固さに対する崇拜の念が込められているという。

「あたかも、建築家や技術者たちが、自分たちだけの実力では、成功を収められず、ルシフェル（悪魔）の巧みに助けを求めたかのようなのである。こうした、橋にまつわる迷信や話には、数限りがない。悪魔や善良な神、その崇拜者たちが、交互にだまされる話である。

初めに橋を渡る者の魂は、悪魔のものになってしまう。悪魔が、人間のために建造に協力した、その報償である。次に、たくさんの悪だくみにより、人々は、悪魔をだましてしまう⁽¹⁰⁾。」

普段我々はあまり意識することもないけれど、元々橋の上とは大きな危険が潜んでいる場所なのだ。橋の上で人は一本の道の上に立たされて、進むか戻るかそれ以外の選択肢はない。「橋を最初に渡る人は、その年のうちに死ぬ」とか、「橋をかける時、悪魔に手伝ってもらうと、最初に渡る人を生贄として欲しがらるから、まず動物を渡らせよ」といった伝説は橋の危険性や、昔、橋をかけるのがいかに困難であったかを伝えている。橋は斯様に、乗り越えていかねばならぬ一つの危険物だったのである。

イギリスの「マザーグース」に出てくる代表的な童謡「ロンドン橋落ちた」(London Bridge Is Falling Down)も、壊れた橋をどのような材料で造り直したらよいのか、橋を造る時の苦労を、ユーモアを交えて面白おかしく伝えている。木 (wood) と粘土 (clay) では流されてしまうし、煉瓦 (bricks) とモルタル (mortar) ではすぐ消えてしまい、更に、鉄 (iron) と鋼 (steel) は曲がるし、たわむ、金 (gold) と銀 (silver) では盗まれる、といかにも悩ましい。

〈羊飼い〉

弟の白く光る骨を見つけて角笛の吹き口を作ろうとしたのは、一人の羊飼いであった。ヨーロッパに広く分布する類話を見ると、骨の発見者のほとんどは羊飼いで、ごくわずかに父親の場合

もある。例えば、スイスの「死んだ骨」(Todtebeindli)では(羊番の少年) Hirtenknabe、ブランデンブルクの「三人兄弟」(Die drei Brüder)では(羊飼いの) Schäfer、ポンメルンの「葦笛」(Das Flötenrohr)やオランダ北部フリース地方の「二人姉妹」(Twee zusters)では(羊飼いの) Hirtとなっている。フランスの「ラヴリエルの笛」(?) (La feilha de llavrier)で、遺骨を集めて柩の中に保管しておくのは父親である⁽¹¹⁾。

定着することのない遊牧民を象徴する羊飼いの役割は、見張り警戒することだろう。羊飼いを神と見なしているのは旧約聖書「イザヤ書」である。

「主は牧者のようにその群れを養い、
そのかいなに子羊をいだし、
そのふところに入れて携えてゆき、
乳を飲ませているものをやさしく導かれる」(第40章11節)

羊飼いは、死んだ骨を蘇らせるためには、一番相応しい人間だったのだろう。イエスは次のように言う。

「わたしがきたのは羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる」(ヨハネ、第10章11節)

弟を殺すのが二人の姉であるフランスの類話「黄金の薔薇」(La rose d' or ')では、羊飼いのことによって見付けられた角笛が夜ひとりでに歌っている。羊飼いの持っている Horn という語で表される角笛は、角と同語である。角には耐久性があり、その象徴するところは力、そして永遠の生命や救済である。弟の肉体は滅びたとしても、この角笛によって彼の魂は救済されたという訳だ。人が死んでも生命と意識は骨の中に残るので、その骨をそっとしておかなければならないという民間伝承もあった⁽¹²⁾。

旧約聖書には、谷の中に満ち溢れている骨が蘇る何とも不思議な描写がある。

「主の手がわたしに臨み、主はわたしを主の霊に満たして出て行かせ、谷の中にわたしを置かれた。そこには骨が満ちていた。彼はわたしに谷の周囲を行きめぐらせた。見よ、谷の面には、はなはだ多くの骨があり、皆いたく枯れていた。彼はわたしに言われた、『人の子よ、これらの骨は生き返ることができるのか』。わたしは答えた、『主なる神よ、あなたはご存じです』。彼はまたわたしに言われた、『これらの骨に預言して、言え。枯れた骨よ、主の言葉を聞け、主なる神はこれらの骨にこう言われる、見よ、わたしはあなたがたのうちに息を与えて生かす。そこであなたがたはわたしが主であることを悟る』。わたしは命じられたように預言したが、わたしが預言した時、声があった。見よ、動く音があり骨と骨が集まって相つらなった。わたしが見ていると、その上に筋ができ、肉が生じ、皮がこれをおおったが、息はその中になかった。時に彼はわたしに言われた、『人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え、主なる神はこう言われる、息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ』。そこでわたしが命じられたように預言すると、息はこれにはいった。すると彼らは生き、その足で立ち、はなはだ大いなる群衆となった⁽¹³⁾。』

〈骨〉

ローマ時代、乾いた人骨は媚薬として使われていたようだ。カルシウムでできている骨は何らかの栄養にはなるのだろうが、果たして本当に媚薬効果があるのかどうかは専門家に聞いてみるとわからない。昔は多くの処方があったらしく、「焼けた人骨とビールを混ぜると非常に酔い

がまわる⁽¹⁴⁾」とも伝えられているから、本当に試した人もいたのだろう。また、聖人の骸骨で飲むと病気が治るとか、敵の骸骨で飲むと敵の力がこちらへ移るともいわれていた。殺した敵王の頭蓋骨で酒器を作っていたのは、中央アジアやシベリアを跳梁した遊牧民族匈奴⁽¹⁵⁾である。「グリム・ドイツ伝説集」によれば、ランゴバルトを平定した王アルポイン（572年没）も敵王クニムントを矢で射殺した後、その頭蓋骨で酒杯を作らせている。

「ある日、ヴェローナにいたアルポインは楽しみに食卓について、お妃に彼女の父の頭蓋骨で作ったあの盃にワインを注ぐよう命じてから言った。

『お前の親父ので、愉快に飲め！』

ロジムントは酷い苦痛を味わったものの、感情を抑えつけ、父の復讐を心に誓ったのである。彼女は、王の護衛で乳兄弟でもあったヘルミクスに、アルポイン王を殺してくれるようにと持ちかけたのだ⁽¹⁶⁾。』

ゲルマン神話の中でも骨は生命力の宿る所と見なされ、非常に大切にされている。雷神トールは空腹になると、自分の牡山羊を殺して皮を剥ぎ熱湯で煮て食べていた。しかし翌日、骨を死んだ山羊の皮の上に置きさえすれば、山羊は直ちに生き返って立ち上がったのである。だがある時、トールが巨人の国ヨツンヘイムへ行く途中で泊めて貰った農家で、予期せぬことが起こった。この時もトールは自分の車を引いてきた二匹の山羊を絞め殺し、皮を剥いでから大鍋に投げ込んだのである。

「さあ、肉はたっぷりある。食べたいだけ食べてくれ。ただ、骨はいためないように気をつけて、みんなこの皮の上にまとめておくんだよ。」

といって、殺した二匹の山羊の皮を、いろいろのそばの床の上に広げておいた。

ところで、百姓の息子はチアルフといい、娘はロスクヴァという名だったが、この息子は食いしんぼうで、トールの言いつけをまもることができなかった。彼は骨の髄が食べたいあまりに、一匹の山羊の足の骨をつかんで、ナイフで断ちわって中身を食べてしまった。

あくる朝、トールはまだ暗いうちにおきて、床にひろげてある山羊の皮のところにいき、ミョルニールの槌をふって、これを祝福した。たちまち山羊は生きかえって立ちあがったが、見ると、後足の一本がびっこをひいているではないか。

「だれだ、おれの言いつけを守らなかったのは。見ろ。後足が一本折れているじゃないか。」

こうトールにどなられて、百姓の息子はふるえあがった。トールはもう、拳の骨が白く浮き出すほどにしっかりと槌をにぎりしめている。百姓はおいおい泣きながら訴えた。

「どうか、トールさま、おゆるしください。どんなことでもして、この罪はつぐないます。わたしたちの家畜もさしあげますし、土地もあなたさまに献上します。ですから、どうぞ命だけはお助けください。」

こういわれると、トールの怒りもいくらかおさまった⁽¹⁷⁾。

この神話からも骨が復活のシンボルと見なされていたことがよくわかる。P・ブレイが二十世紀初めにニューブリテン島で集めた神話では、骨を葉で覆い魔法をかけると、多くの英雄が死から蘇って来る⁽¹⁸⁾。

古代の女王アルテミシアについても書いておこう。

紀元前四世紀、アケメネス朝ペルシャ支配下の小アジア、カリア国の総督マウソロスは、権力と富を分散させないための当時の慣習に従って、自分の妹アルテミシアと結婚した。紀元前353年、最愛の夫に先立たれたアルテミシアはハリカルナッソスの町に豪華なマウソロス霊廟を造ったのだ。これが古代七不思議の一つといわれる、有名なマウソロスの霊廟である。伝説によると、彼女は夫の遺灰をワインに混ぜて（一説では自分の涙で）飲み、自分自身が「生きた柩」になったという。これなど、最愛の人と自分との究極の一体化といえるだろう。

〈類話〉

「昔話の型」(The Types of The Folktale)⁽¹⁹⁾によれば、これらの類話は780—789「真実が明るみに出される」(Truth Come To Light)という一つの型に収斂されるようだ。簡潔にまとめられた780の内容は以下の通りである。

「歌う骨。兄が自分の弟(妹)を殺し、地面に埋めてしまう。一人の羊飼いがその骨から笛を作り、それが秘密を暴いて明るみに出す。別の類話では、殺人はいくつかの違った方法で暴露され、楽器(ハープや笛)は骨か、あるいは墓から伸びて来た木で作られている」。

次に同じ780のAにまとめられた「人肉嗜食をする残忍な兄弟たち」(The Cannibalistic Brothers)の内容は次のようになっている。

I. 殺人者

六人の兄弟が彼らの妹と暮している。ある日、料理中に妹が指を切り、その血が料理の中に落ちてしまう。それを食べた兄たちは、料理がこの上もなく美味しくなったと思って妹を殺し、食べてしまったのだ。末の弟はそれを断るか、あるいは別の兄弟が末の弟に無理矢理弓矢で妹を殺させる。

II. シャべる木

妹の墓から花の咲く植物、または木が伸びてくる。その木から作られたバイオリン、あるいは笛等が奏でられると、女の子が語り出す。楽器から女の子が現れる(「不思議なハウスキーパー」[N831, 1])。女の子は王様か、あるいは音楽家と結婚する。乞食になってやって来た兄弟たちは、女の子に本当のことを突き付けられ、地面に埋められる。そして彼らの髪の毛が雑草となって生えて来た。

780B 「シャべる髪の毛」

継母が女の子を生き埋めにする。彼女の髪は小麦、あるいは雑草となって伸び、自分の不幸を歌う。その後、彼女は見つけられて生きてままだ掘り出される。継母は同じ穴に埋められた。

註

- (1) 金田鬼一訳「グリム童話集」1. 岩波文庫。1979年。
- (2) バーバラ・ウォーカー「神話・伝承事典」山下主一郎、他訳。大修館書店。1998年。
- (3) (2)と同書。
- (4) アト・ド・フリース「イメージ・シンボル事典」山下主一郎、他訳。大修館書店。1993年。
- (5) 高津春繁「ギリシャ・ローマ神話辞典」岩波書店。1960年。
- (6) マイケル・グラント、他「ギリシャ・ローマ神話事典」西田実、他訳。大修館書店。1988年。
- (7) 山室静「ギリシャ神話」社会思想社(現代教養文庫430)。昭和38年。
- (8) E・トンヌラ、他「ゲルマン、ケルトの神話」清水茂訳。みすず書房。1960年。
- (9) 「ニーベルンゲンの歌」(前篇) 相良守峯訳。岩波文庫。昭和30年。

- (10) ジャン・シュヴァリエ、他「世界シンボル大事典」金光仁三郎、他訳。大修館書店。1996年。
- (11) Johannes Bolte, Georg Polivka: Anmerkungen zu den Kinder—und Hausmärchen der Brüder Grimm. 1: Olms—Weidmann. Hildesheim, Zürich, New York. 1994.
- (12) (4) と同書。
- (13) 「旧約聖書」(エゼキエル書第37章 1～10節)。日本聖書協会。
- (14) (4) と同書。
- (15) たとえば井上靖「楼蘭」に、匈奴の捕虜となっていた胡人に「匈奴は月氏の王を破り、その頭を酒の飲む器とした」と語らせる場面がある。
- (16) 金成陽一「まだあるグリムの怖い話」東京堂出版。2012年。
- (17) (7) と同書。
- (18) (10) と同書。
- (19) A. Aarne/S. Thompson: The Types Of The Folktale: Academia Scientiarum afennica. Helsinki. 1981.

参考資料、文献

1. P. Bley: Sagen der bairischen auf Neupommern. Südsee, in Antropos, I X, 1914.
2. Im brandenburgischen Märchen bei Engeln. Lahn1, 105Nr. 68.
3. Gonzenbach. Nr. 51.
4. Aus dem krankauer Land bei Ciszewskil, 78nr. 67.
5. 関敬吾「日本昔話大成」第5巻(本格昔話4「継子譚」)。角川書店。昭和53年。